

アスペクトを表すテクルの多義性 — 語彙概念構造による分析 —

上原由美子
(神田外語大学)

要旨

本稿では、事象投射理論の枠組みを用い、テクルが持つ「発生」「変化」「継続」というアスペクト的多義性について、動詞「来る」の概念構造を基に、事象の構成成分の計算により一元的に説明できるテクルの概念構造を提案した。またテクルが漸次的変化を表す理由と、テクルが共起しない事象についてその理由を明らかにした。具体的には以下のことがわかった。①テクルが表す意味は前接する事象Xの構造による②発生、変化を表すテクルは「話者の領域」を終了限界とし、この終了限界とXの開始限界が同定されXとテクルの単一化が実現する③テクルと単一化できる事象Xは、Xの構成要素の中に非限界的・稠密な「幅」が必要である。具体的には発生のテクルのXには非限界的であることおよび「動き」が必要で、変化のテクルのXには二側面性または対象の増分性が必要である④テクルが漸次的変化を表すのは、変化が稠密経路に沿って進行するからである。

キーワード：単一化、解釈規則、増分性、稠密性、事象投射理論

1. はじめに

動詞「来る」が補助動詞として動詞に接続する形式（以下、テクル）は、空間移動を表す用法(1)とアスペクトを表す用法(2)に大きく分けることができる（今仁1990、近藤2000、有田2001など）。

(1) 空間移動用法

- a. 母が、味噌を送ってきた。(移動系)
- b. 一杯飲んできたので、顔が赤い。(継起系)
- c. 走ってきたので、喉が乾いた。(同時系)

(2) アスペクト用法

- a. 雨が降ってきた。(発生系)
- b. 肉が腐ってきた。(変化系)
- c. 我々は、伝統を守ってきた。(継続系) (今仁 1990:58)

本稿は、(2)の「アスペクト用法」を考察の対象とする。アスペクト用法のテクルについては、動詞「来る」との関係において、両者が時間と空間の写像関係にあるという観点から多くの分析がなされてきた（森田1968、近藤2000、有田2001、澤田2008、坂原2012など）。本稿もこの観点から、アスペクト用法のテクルがなぜ「発生」「変化」「継続」という意味を表すのかを考察し、その多義性を一元的に説明できるテクルの概念構造を提案する。分析の枠組みとして、事象投射理論（岩本2008）を用い、テクルとテクルに前接する事象Xの構成成分の計算から、それぞれの意味を表す構造に至るメカニズムを明らかにする。また「変化」を表すテクルが「だんだん腐ってきた」のような漸次的変化を表す理由、およびテクルが共起しない事象についてその理由を明らかにする。なお、本稿ではテクルの三つの意味のうち、主に「発生」と「変化」について扱い、「継続」のテクルの詳細については稿を改める。

本稿において例文は(2a～c)に合わせ、タ形の「テキタ」を用いるが、テンスは本稿の議論に関わらないため、構造についてはテンス性を排除し、「テクル」として考える。

以下、第2節では分析の枠組みである事象投射理論（岩本2008）について概略を述べ、第3節で動詞「来る」とそれに基づくテクルの概念構造を提示し、第4節と第5節では、それぞれ「発生」「変化」を表すテクルについて考察する。第6節はまとめである。

2. 分析の枠組み

本節では、岩本（2008）に基づき、本稿の分析の枠組みである事象投射理論について、動詞「行く」を例に概観する。

岩本（2008）は、Jackendoff（1996）の「構造保持束縛理論」を修正発展させ、「動き」「変化」といった概念をより単位的な素性対立によって定義し、一貫した体系性の中に事象のアスペクトが定義される「事象投射理論」を提案した。

例えば「行く」の事象投射構造は(3)のように示されている。

(3) XがYに行く

$$\left[\begin{array}{ccc} & [\beta] & [0d, t_i] \\ & \left\langle \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ bdby^+(Y)^\beta \end{array} \right\rangle^\alpha \uparrow & \left\langle \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ bdby^+(t_i) \end{array} \right\rangle^\alpha \uparrow \\ BE([X], & [space\ 0d]); & [time\ 0d] \end{array} \right] \quad (\text{岩本2008:133})$$

(3)は、「対象Xが、ある時間に、ある場所に存在する状態」(最下段)が、Yによって終点を限界づけられた(bdby + (Y)) 投射軸PRにより、「 β によって同一指示を与えられた場所Yに t_i の時間に存在する状態」(最上段)に投射(PR)されることを表している。空間項と時間項は α で構造保持束縛されており同期的に投射される。構造の中の記号は関数や素性を表している。(3)の構造で用いられている記号を表1に示す。⑧と⑨は(3)の構造にはないが、後述の構造で用いるため併せて掲載しておく。

表1

	記号・用語	言語/非省略形	意味・定義
①	1d	1 dimensional	1次元
②	PR	projection function	<投射関数>。0～2d実体を投射し [(0～2) + 1d] 実体を定義する。状態(0d)を動態(1d)に投射するのも、この関数。
③	bdby ±	bounded by ±	限界的な実体(動態、経路、物体)が何によって限界付けられているかを表す素性。始端において限界付けるものを「-」、終端において限界付けるものを「+」とする。
④	± dir	± directional	事象や実体が方向性を持つものであるか、そうでないかを区別する素性。<動態>と<経路>は「+」、<状態>と<場所>は「-」である。
⑤	± b	± bounded	物体や事象が限界点を持つかどうかを表す。<限界性素性>。<有界性素性>とも言う。

⑥	± den	± dense	〈稠密性素性〉。投射関数の素性。実体が稠密的に投射しているか、それとも始端、終端のみで構成されているかを区別する。
⑦	± i	± internal structure	ある実体が、複数の個体によって構成されているか、単体で存在しているかを区別する素性。
⑧	GR	grinder	限界的なものの境界を取り去り、非限界化する関数。[+b,-i] → [-b,-i] とする。
⑨	PL	plural	単数のものを複数化する関数。[+b,-i] → [-b,+i] とする。

(岩本2008: viii-xより)

表1の他、本稿の分析に用いる重要な概念として、(4)「単一化」と(5)「解釈規則」を挙げておく。

(4) 単一化：〈単一化〉(unification)とは、二つの意味構造AとBから一つの意味構造 $C = A \cup B$ を構成することである。単一化の条件は無矛盾であることとされる (Shieber:1986)。(後略) (岩本2008:93)

(5) 解釈規則¹：概念解釈の基本は〈単一化〉であるが、概念的不整合のため一般的な単一化理論によっては解釈不能となるべき言語表現が、概念構造の修正を受けた上で解釈可能となる場合がある。このように概念構造に修正を加える規則を〈解釈規則〉と言う (Jackendoff:1991)。 (岩本2008:93)

(4)にあるように単一化の条件は意味構造AとBが無矛盾であることだが、稠密性(±den)については、非稠密な(-den)構造は稠密な(+den)構造に包摂されて単一化が可能となる。稠密は無限の点によって、非稠密は始点と終了限界の2点あるいはどちらか1点によって構成されるものであり、前者が後者を包摂し、両者は矛盾なく単一化され、稠密な構造となる(岩本2008:140)。例として、岩本(2008)より、動詞「行く」と移動手段を表す「新幹線で」を単一化する例を挙げる。(3)に見るように「行く」はもともと着点のみから構成される非稠密(-den)な経路を持つ。一方「新幹線で」は移動中の無限の点によって構成されており稠密(+den)である。稠密な修飾成分

「新幹線で」と非稠密の「行く」が単一化されることにより(6)のような稠密的事象が定義される。

(6) 新幹線で京都に行く

$$\left[\begin{array}{c} \begin{array}{c} \text{新幹線} \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([\beta]) \end{array} \\ \left(\begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([KYOTO]^\beta) \end{array} \right)^\alpha \\ BE([X], \quad [space\ 0d]); \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([t_i]) \end{array} \\ \left(\begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([t_i]) \end{array} \right)^\alpha \\ [time\ 0d] \end{array} \right]$$

(岩本2008:140)

以上、事象投射理論(岩本:2008)より、本稿の分析で用いる概念の概略を示した。

3. 動詞「来る」とテクル(発生・変化)の概念構造

発生と変化を表すテクルの構造を考えるにあたり、まず空間的な位置変化を表す動詞「来る」の構造を(3)「行く」をもとに(7)のように提案する。

(7) Xが来る

$$\left[\begin{array}{c} \begin{array}{c} [\beta] \\ \left(\begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ bdby^+([domainS]^\beta) \end{array} \right)^\alpha \\ BE([X], \quad [space\ 0d]); \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} [0d, t_i] \\ \left(\begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ bdby^+([t_i]) \end{array} \right)^\alpha \\ [time\ 0d] \end{array} \right]$$

「来る」の意味は、対象Xが「話者の領域」に移動することである。空間を移動するという点では(3)「行く」と同じであるが、「行く」とは終了限界(bdby+)が異なり、「話者の領域」([domainS]と表す)となる。なお「XがYに来る」と着点Yが明示されている場合は、Yが[domainS]と無矛盾であれば、つま

発生が持つ動きの「幅」は稠密であるといえる)。

- ③ 事象 X が持つ開始限界 (bdby -) と、テクルの終了限界 (bdby +) である「domainS (話者の領域)」が「 β 」で同定されることで、事象 X とテクルの構造は単一化される。時間については、事象 X の開始限界の時点と、テクルの終了限界の時点が「 t_i 」で同定される。
- ④ テクルで発生・変化を表す事象 X が持つ開始限界 (bdby -) も、②と同様に点 (0d) ではなく、一定の「幅」(ε) を持つ (単一化は互いに無矛盾であることが条件であるため ((4) 参照)、④と②は相互に保証される)。

なお、(9) に示すように、「 ε 」で表した「幅」は、Jackendoff (1991) で達成 (Achievement) の定義に際して用いられている、限界点におけるわずかな時間的「拡張」の概念である。

(9) The trickiest case is the achievement such as *reach the top, arrive, die, and, notably, finish*. (中略) : they are all events that mark the culmination of some larger event. Although they are fundamentally 0-dimensional, the optional expansion with epsilon provides a little temporal window into which we can sneak a progressive:

$$\text{Achievement} = \left[\begin{array}{c} +b, -i \\ [DIM\ 0(+\varepsilon)d\ DIR] \\ \text{Sit} \quad BD^+(\lceil \] \end{array} \right]$$

(9) の構造を補足すると、BD + (bounded +) は、終了限界で限界づけることを表しており、非限界的事象を限界的事象に変換する関数である。「DIM」(dimension) は次元性を、「DIR」(directional) は方向性を持つことを表しており、それぞれ、表 1 の「d」「+dir」に相当する。

次節以降では、発生と変化のテクルについて、どのようなメカニズムでそれぞれの意味を表すテクルの構造が定義されるか考察する。

4. 発生のテクルの概念構造

本節では、(2a) 「雨が降ってきた」や、他に「風が吹いてきた」「月が見え

てきた」など、発生を表すテクルの構造を考える。「雨が降る」は、「3時間雨が降った」のように期間を表す句と共起することからもわかるように、基本的には非限界的（-b）事象である。一方で、「庭を掃除してから30分で雨が降った」のように、文脈によっては期限を表す句とも共起し、限界的な性質も持つ。この場合、「雨が降り始めるまで30分」という開始限界（bdby-）を表す。それぞれの構造を考えると、まず非限界的な「雨が降る」は(10)のようになる²。

(10) 雨が降る

$$\left[\begin{array}{ccc} & \left[\begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] & \left[\begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ & \left\langle \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^{\alpha} \uparrow & \left\langle \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^{\alpha} \uparrow \\ BE([\overline{PR}]), & [space\ 0d]; & [Time\ 0d] \end{array} \right]$$

次に、限界的な方の「雨が降る」の構造であるが、上述したように、これは一定の文脈や修飾成分によって成立するものであり、解釈規則によって、(11)のような開始限界が導入される関数が適用されているものと考えられる。

$$(11) \text{ Inception} = \left[\begin{array}{c} +b, -i \\ [DIM\ 0(+\varepsilon)d\ DIR] \\ Sit\ BD^-([]) \end{array} \right]$$

Jackendoff (1991:40)

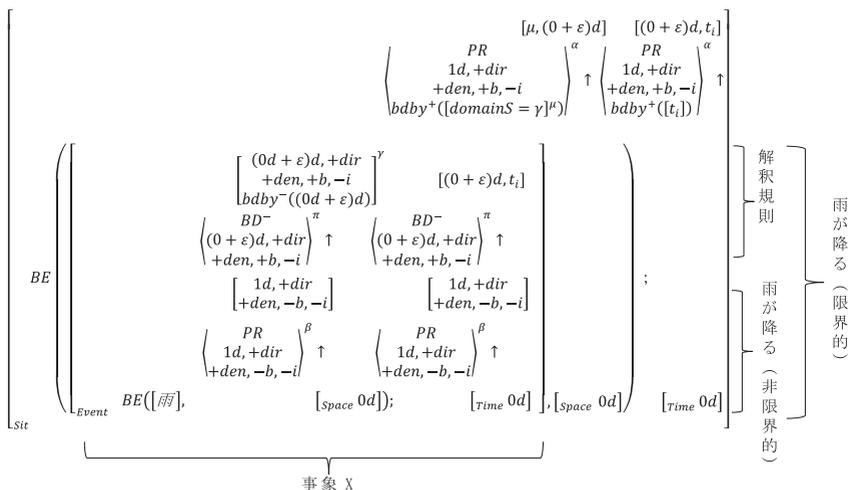
前節でみた(9)達成 (Achievement) が終了限界で限界づける「BD+」であるのと反対に、(11)は開始限界で限界づける「BD-」の関数であり、開始 (Inception) の意味を表す (Jackendoff: 1991)。(11)も(9)同様、非限界的事象を限界的な事象に変換する関数である。

さて、発生 of テクルの事象Xは、(8)で見たように、構造の中に開始限界を含む必要があるため、この「雨が降る」は(10)の非限界的な方ではなく、(11)を含む限界的な構造になると考えられる。

紙幅の都合で限界的な「雨が降る」の構造は省略するが、テクル(8)と単一

化された「雨が降ってくる」の構造は(12)のようになる。左下の [Event] の部分が「雨が降る」に該当する（紙面の制約上、適切に表示できないが、構造の右の「雨が降る」等の表示は事象X内の該当部分のみを指し、右外側の [Space] と [Time] は指していない。以下すべての構造について同様）。

(12) 雨が降ってくる



(12)は、解釈規則によって導入された「雨が降る」の開始限界 (bdby-) がテクルの終了限界 (bdby+) と「 γ 」で同定され単一化されることにより、「事象の発生が話者の領域に到達した」という意味を表す。

(12)における単一化で、もう一つ重要な点は、テクルの経路が稠密 (+den) となる点である。動詞「来る」(7)はもともと着点のみで構成される非稠密な経路を持つ。しかし、発生は稠密な「幅」を持っており、(4)の単一化に関する説明で述べたように、非稠密が稠密と単一化する際、非稠密は稠密に包摂され矛盾なく単一化されて全体が稠密となるため、テクルはこの稠密な構造との単一化により稠密となる。

なお、発生のテクルが開始の局面に焦点を当てる機能をもつ、ということは、有田 (2001) の発生に関する記述「出現という事態は、基準時点以前には存在しなかった状態が基準時点以降に存在すると捉えなおすことができる。(中

略)「非存在→存在」の局面がテクルによって焦点化されるのである」(傍点は原文)(p.5)が表す内容とも合致するものである。

以上のように、発生を表すテクルは、もともと非限界的事象Xに解釈規則により開始限界を導入し、この開始限界とテクルの終了限界が単一化された構造となる。

なお、非限界的な事象Xであっても、(2c)の「伝統を守る」は、「伝統を守ってきた」の形で「伝統を守り始めた」のような発生や開始の意味を表さず、継続を表す。つまり、非限界的な事象のテクルがすべて発生を表すわけではなく、一定の条件を満たす事象のみがテクルで発生を表すといえる。この条件とは、「雨が降る」のように、「動き」があること(つまり事象投射構造上で空間項が投射していること)と考えられる。「動き」がないと、解釈規則の「BD-」で開始時点を切り取ることができないからである。なお、継続を表すテクルについては本稿ではこれ以上立ち入らず、稿を改める。

5. 変化のテクルの概念構造

5.1 変件事象のタイプとテクルとの共起関係

次に、変化を表すテクルについて考察する。構造を考える前に、どのような事象Xがテクルで変化を表すのか見ておく。(13a)「肉が腐ってきた」の「腐る」は変化を含む事象(以下、変件事象)であるが、(13a～d)に見るように変件事象がすべてテクルで変化を表すわけではない。

- (13) a. = (2b) 肉が腐ってきた。(増分性がある事象)
 b. あたたくようになってきた(二側面的事象)
 c. *犬のポチが死んできた。
 d. #バターを溶かしてきた。

結論から述べると、テクルで変化を表すのは、(13a)のように対象の広がりによって変化が進行する事象(以下、増分性がある事象)と、(13b)のように境界あるいは量やサイズがそれ自身を基準として変化する動詞、つまり動きと変化の二側面性を持つ動詞の事象(以下、二側面的事象)である。一方、変件事象であっても、(13c)の「死ぬ」のように対象の広がりによって変化

(14)の「肉が腐る」の部分は、「肉」が [ROTTEN] という終了限界 (bdby +) に投射し、さらに [ROTTEN] 状態が、肉の広がり (増分性) により、3d に投射し広がっていくことを表している。

(8)のテクルの構造に基づく、「肉が腐ってくる」の構造は、テクルの終了限界 (bdby + (domainS)) と「肉が腐る」が持つ開始限界が同定されて単一化する構造となるはずである。しかし「肉が腐る」の状態変化の部分 ((14)の「肉が腐る」の β の投射)は終了限界 (bdby +) で限界づけられており、テクルとの単一化に必要な開始限界 (bdby -) ではない。ところが、(14)では対象項の「肉」に広がり (増分性) があり、状態 [ROTTEN] はこの増分性に沿って進行していく (θ で投射されている部分) ため、ここに解釈規則を適用し、「肉」を投射して開始限界 (bdby -) を導入し、「肉が腐る」をテクルと単一化することができるのである。なお、状態項の [ROTTEN] は定項であるため投射することはできないため (定項は、それを投射することはできない (岩本 2008: 190))、対象項と時間項だけが開始限界に投射する。

時間については、「肉が腐る」の終了限界 (bdby +) と、状態 [ROTTEN] が肉に広がり始める開始限界 (bdby -) と、それが話者の領域に到達する、テクルの終了限界 (bdby +) の3つの時点が「 t_i 」で同定される。

以上のように、増分性がある変件事象においては、解釈規則で開始限界が導入され、テクルとの単一化が実現すると考えられる。

(14)でも(12)「雨が降ってくる」と同様、稠密な事象 X との単一化によりテクルの経路が稠密 (+ den) となる。変化のテクルが漸次的進行を表すのは、このように稠密となった経路に沿って変化が進んでいくことにより説明される。

なお、上原 (2023) では「肉が腐ってくる」について、定項 [ROTTEN] が (bdby + [SPEAKER]) に投射する構造が示されているが (p.284)、上述したように定項は投射できないため、この構造は正しくない。

ここで (13c) 「* 犬のポチが死んできた」のような増分性のない変件事象はテクルが共起せず、非文となる理由を確認する。「ポチが死ぬ」は (15) のような構造を持つ。

(15) ポチが死ぬ

$$\left[\begin{array}{ccc} & [\beta] & [0d, t_i] \\ & \left\langle \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ bdby^+([DEAD]^\beta) \end{array} \right\rangle^\alpha \uparrow & \left\langle \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ bdby^+([t_i]) \end{array} \right\rangle^\alpha \uparrow \\ \text{sit } BE([\text{ポチ}], & [\text{prop } 0d]); & [\text{time } 0d] \end{array} \right]$$

(岩本 2008:259 「死ぬ」より)

「死ぬ」は(14)の中の「腐る」と同様、終了限界 (bdby +) を持つ事象であるが、「腐る」と異なるのは、対象の広がりに沿って状態が変化することを表さない、つまり変化の「幅」がなく、変化が進行しない点である。変化の「幅」がないことは、「*ポチが少し死ぬ」「*ポチがさらに死ぬ」が言えないことからわかる。構造上は、(14)の「腐る」とは異なり、「ポチ」の広がりに沿って状態 [DEAD] が変化しないため、対象項「ポチ」は投射せず、また状態項も上述したように定項である [DEAD] であるため投射しない。つまり、テクルと単一化するために必要な「幅」(「ε」) を引き出せないのである。このように、「死ぬ」は(14)の「腐る」とは異なり対象項にも状態項にも、解釈規則を適用して開始限界 (bdby -) を導入することができないことから、テクルと単一化できず、「*ポチが死んできた」は非文となる。このタイプには、ほかに「#試験に落ちて / 受かってきた」「#破産してきた」「#骨折してきた」などがある^{3,4}。

5.3 二側面的事象における変化のテクル

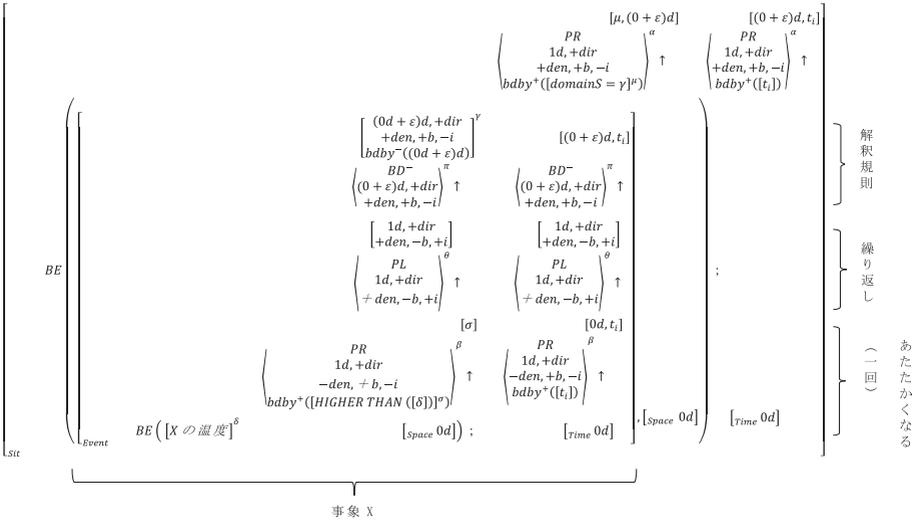
次に、(13b)「あたたかくなってきた」のような二側面的事象がテクルで変化を表す構造を見る。このタイプのテクルには、「水位が上がって / 下がってきた」「セーターが伸びて / 縮んできた」「子供の数が増えて / 減ってきた」などがある。二側面的事象は、限界的な事象と非限界的な事象の二つの構造が定義できる(岩本 2008:200)。限界的な構造は一回的な変化の事象で、非限界的な事象は変化が連続的に起こる事象である。このうち、テイルと単一化できるのは、非限界的(連続的)な方であると考えられる。なぜなら、一回的

な変化においては変化はある一点に到達することで完結し、(15)「ポチが死ぬ」のように定項に投射する構造と同じになるからである。つまり、それ以上投射することができず、解釈規則を適用して、テクルと単一化するために必要な開始限界 (bdby -) を導入することができない。一方、変化が連続的に起こる非限界的な事象の方は、一回的な「あたたかくなる」に複数化の関数である PL (表 1 参照) を適用した非限界的な事象であると考えられ、テクルとの単一化を可能にするために解釈規則で開始限界を導入することが可能である。二側面事象のテクルの構造は (16) のようになると考えられる。(16) も (14) 「肉が腐ってくる」と同様に、事象の開始限界 (bdby-(HIGHER THAN ([δ])))) とテクルの終了限界が同定され、事象 X とテクルが単一化する。

時間については、一回の「あたたかくなる」の終了限界の時点と、それが繰り返されて非限界的な事象となる開始限界の時点と、テクルの終了限界の3つの時点が「 t_i 」で同定される。

なお、(16) でも (14) 「肉が腐ってくる」と同様に、テクルの稠密性は稠密 (+den) となる。なぜなら、非限界的 (連続的) な方の「あたたかくなる」は稠密であり (非限界的な実体は必然的に稠密である。なぜなら、開始限界と終了限界がない経路が非稠密であれば無になってしまうからである)、これと単一化するテクルは (14) 「肉が腐ってくる」と同様に稠密となるからである。二側面的事象のテクルも漸次的変化を表すが、これは「腐ってくる」と同様、稠密な事象 X との単一化によりテクルの経路が稠密 (+den) となり、その稠密経路に沿って変化が進んでいくからであると考えられる。

(16) あたたかくなってくる。



以上、変化のテクルをまとめると、変化のテクルを表す事象Xのタイプは、終了限界をもつ変化事象で、かつ増分性がある対象か二側面性がある事象である。つまり、変化の終了後に一定の「幅」がある事象と言える。この「幅」があることにより、解釈規則が適用される条件を満たし、対象項または状態項に開始限界への投射が導入され、その事象Xの開始限界とテクルの終了限界（話者の領域）が単一化される。言い換えれば、終了限界を持ち、かつ増分性も二側面性もない「死ぬ」のような事象は、開始限界への投射を導入するための解釈規則を適用することできず、テクルと単一化できずに非文となるか、空間移動などアスペクト以外の意味を表す。またテクルが漸次的変化を表すことは、変化が稠密な経路に沿って進行するからであり、テクルが稠密であることは、単一化をした事象Xが稠密であることから保証される。

6. まとめ

以上、本稿では、「発生」と「変化」のテクルについて、前接する事象とテクルの構成成分の計算から、多義性のメカニズムが一元的に説明できることを

示した。また、それぞれのテクルの意味を表す事象Xの条件、および「変化」のテクルが漸次的変化を表す理由、変化事象でありながら変化のテクルを表さない事象についてその理由を構造から明らかにした。具体的には以下のことがわかった。

- ① テクルが表す意味は、前接する事象Xのタイプにより決まる。
- ② 「発生」「変化」を表すテクルは、「話者の領域」に事象Xが到達する構造を持つ。この「話者の領域」がテクルの終了限界であり、これとXの開始限界が同定されることでXとテクルの単一化が実現する。
- ③ テクルと単一化できる事象Xの条件として、事象Xの構成要素の中に非限界的・稠密な「幅」が必要である（非限界的な実体は、必然的に稠密である）。具体的には、「発生」については非限界的かつ「動き」のある（空間項が投射されている）事象、「変化」については増分性または二側面性がある事象であることが必要である。
- ④ 変化のテクルが漸次的変化を表すのは、変化が稠密な経路に沿って進行するからである。テクルが稠密な経路を持つことは、テクルと単一化できる変化事象が稠密であることから保証される。

なお、本稿では扱えなかった「継続」を表すテクル、および動作主性を含む事象Xのテクルについて明らかにすることは今後の課題としたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、岩本遠億氏に有益なご助言をいただきました。お礼申し上げます。ただし誤りはすべて筆者の責任です。

注

¹ 解釈規則は無制限に導入されるのではなく、「解釈規則による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」（解釈規則は、それが適用する事象投射構造の一部あるいは全部を取り消すことはできない）が設けられている（岩本2008：156）

² 「雨が降る」を事象投射構造で詳しく表すと「空から一滴の水が落ちるという事象が一定の範囲で複数回生じる」という構造になるが、ここでの議論に関係しないため内部構造は省略する。

- ³ 「死ぬ」タイプの事象でも対象が特定の個体ではなく、「この川では排水汚染で多くの魚が死んできた」や「うっかり者の京子は、今までたくさんの財布をなくしてきた」ように反復解釈となる事象のテクルは非文にならず、継続を表す。これは、複数事象にはPL（表1参照）が適用され、非限界的事象となるからである。
- ⁴ 「生まれる」など、開始限界 (bdby-) を持つ変化事象については対象の増分性や変化の「幅」がなくてもテクルが共起し「生まれてきた」のように発生の意味を表す。これは、「生まれる」がbdby-を持つため(12)「雨が降ってくる」の発生のテクルのような構造を持つことから、テクルと単一化できるためであると考えられる。

参考文献

- 有田節子 (2001) 「日本語の移動構文「V-テクル」についての覚書」『大阪樟蔭女子大学論集』38号, 1-10.
- 今仁生美 (1990) 「VテクルとVテイクについて」『日本語学』9 (5), 54-66.
- 岩本遠億 (2008) 『事象アスペクト論』東京：開拓社
- 上原由美子 (2023) 「テクルの多義性と共起成分について— 語彙概念構造による分析—」『神田外語大学紀要』35, 275-294.
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』東京：ひつじ書房
- 坂原茂 (2012) 「アスペクト表示の複合動詞「Vて来る」と空間時間メタファ」『国語と国文学』89 (11), 53-62.
- 澤田淳 (2008) 「「変化型」アスペクトの「テクル」「テイク」と時間性— 形状「テキタ」と「テイツタ」の非対称的な分布に注目して—」『日本語の研究』4-4, 63-69.
- 森田良行 (1968) 「「行く・来る」の用法」『国語学』75, 75-87.
- Jackendoff, Ray (1991) "Parts and Boundaries," *Lexical and Conceptual Semantics*, ed. By Beth Levin and Steven Pinker, 9-45, Blackwell, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1996) "The Proper Treatment of Measuring Out, Telicity and Perhaps Even Quantification in English," *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 305-354.